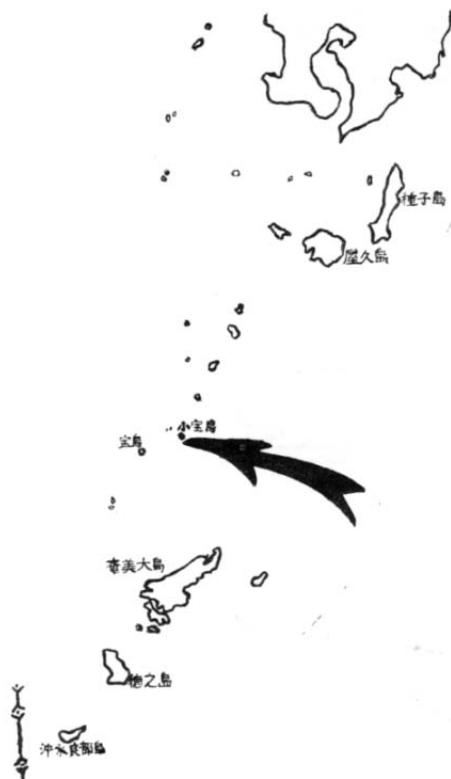


無人島合宿 雑感

三宅 得 司



我が探検部は今年で創立12周年目をむかえ、創立当事の活動と比較し、現在の活動状態を見るに、その活動範囲は拡大し、又活動内容のレベルもより高度になる傾向が著しく現われて来ている。特に、海外の企画が多く出て来ている現在、これらの活動によつては、今までの活動およびトレーニングでは、体得出来なかつた様な困難や危険が我々を待ちかまえているように思われる。

そこで、これからの活動においては今まで以上のデスクワークの必要性と同様に、極悪条件下に

おける活動を支える我々の体力的および精神的向上を心がけなければならない。

これは我がクラブの活動規模が拡大し、活動における困難度や危険度が増大する傾向にあるかぎり、クラブがどのような状態にあろうとも体力的および精神的向上の為の鍛練は怠る事なく行なわれなくてはならないと信じている。

この事を考える時、我々は種々の悪条件下において実際にどれほどの活動が出来、又体力的、精神的にどれほどの実力があるかを知つておく必要があるように思える。

自分の限界を知る事によつて、その限界を少しでも拡げる努力をし、あらゆる活動に際して支障をきたさないような実力を身につける事は、

今までの部員も目指して来たし、又これからの部員にとつても重要な課題のひとつとなるであろう。

そこで、我々は大自然にその場を求め、あえて悪条件を作り、そこで生活する事によつて自分の体力的、精神的実力の限界を知ろうと思ひ、その場を九州の南方海上のトカラ列島に属す無人島の小島に求めた。そして、この島で約2週間の無人島生活を送る事に決つた。

無人島と聞けば、だれしもデフォーの書いたロビンソン・クルーソーを思い出すであろう。そし

て、幼い頃一度はだれしもロビンソン・クルーソーの様に無人島で自給自足の自由奔放な生活を送る事を夢見たであろう。しかし、それは大部分の人間にとつては夢でおわつてしまう。

ロビンソン・クルーソーの場合、難破船から自分の間生活する為に必要なだけの食糧や武器やその他色々な道具を持ち出してそれを利用している。たとえば、銃、ナイフ、火薬、大工道具、釣り道具、パン、米、酒、布などである。といつても我我は何もロビンソン・クルーソーのような無人島生活をまねようとは思わない。

我々はこの小島においていわゆる日常生活において用いる生活用具の大部分を否定し、自然の恵みによつてのみ生きるという極めて悪条件な状態にあつて、これを克服しながらも更に調査活動として、島内測量と植物採集を行ない、このような状態において我々はどのような行動をとり、又精神的にどのような変化がおこるかを調べる心理学的洞察も行なう。

又、ロビンソン・クルーソーの場合は島に水も川もあり、それに色々な動物や鳥もたくさんいたが、この小島では水もなければおそらく動物や鳥もないことだろう。ただあるのは周囲の海からの幸（魚や貝）と地上にある食用の植物（ふき）ぐらいのものであろう。

この様な条件での小島の生活で何も持つて行かないのなら、まったく生きる事は不可能だろう。そこで、我々はまず第一に必要な水を海水から蒸留して獲得する為に、真水製造器なる物を作り、学校でその実験も行ない、一応成功をおさめたのでこれを3台持つて行くことになつた。

そして、食糧は現地にて獲得するが、非常用として乾パンを1人につき1袋と若干の乾燥野菜と調味料として塩、しょうゆを持つて行く。

又、魚を獲得する為の道具として水中銃2挺と

釣り道具を、用意した。

我々一行6名を乗せた第20島丸は夕日に映える桜島を後にして、南へと進んでゆく。

時間が経過するにつれて、海は澄み、胸の中がスカツとする何とも言いがたいコバルト色に変化して行く。そして、鹿児島を出発して3日目の8月6日の朝、太陽が昇ると、目的地である小島とその右に小宝島が見えた。

小島は地図で見て想像していたよりもだいぶ大きい、岩だらけで木がほとんどなく、海岸は珊瑚礁が大変発達しているために、砂浜が全然ない。

この日は風があり、海が相当荒れていた。この小宝島の駐在員に案内されて、宝島小中学校小宝島分校に荷物を置きに行く。

小島の横にあるこの小宝島は、鹿児島より南方海上約300Kmにあり、島民約50人で、幅4mぐらいの道の両側に風よけの石垣で周囲を囲んである家が15軒ほど並び、山を背にして海に面した所にこの人家がある。

我々が小宝島に到着した日は、海が荒れている為に小島へは船が出せなく、海が静かになるのを待つ事となつた。その為、この日はこの分校で1泊する事に決まり、早速、食糧獲得の為、皆で海岸へ行つた。

滝氏と松宮は早速水中銃を持つて海中へ獲物を求めて行き、残りの4名は釣りを始めた。

2時の昼食には40cmのパロットフィッシュ1匹と小魚4匹を焼いて皆で食べる。しかし、魚は思ったより腹のたしにはならず、夕食が待ちどおしかつた。

次の日も小島へは船が出ず、この海の様子だと小宝島でかなり足どめされそうなので、小島に渡れる日まで一応この島で活動を始める事になり、

中村といつしよに居住地を捜しに出かけた。

この島の周囲は珊瑚礁が発達していて、それが荒波にあらわれて大変変化に富んだ海岸美を作っている。この海岸美を見ながら歩いていると、少しの間ではあるが空腹感から解放される。

東海岸の岩かげに良い場所が見つかったので、午後、そこへ移動した。

この岩かげがこれからの生活の場となり、無人島合宿が本格的に始まったのである。

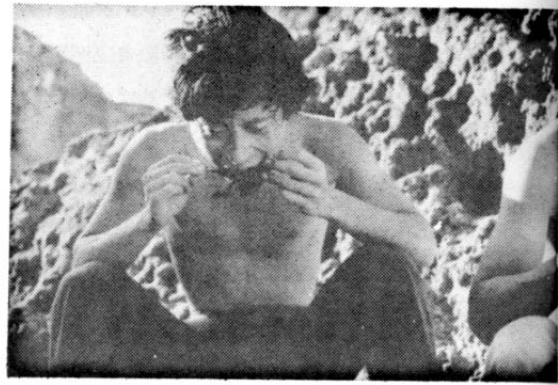
夕食後、暗くて何もする事がなくて寝ようとした時、招かざる客が来た。それは蚊だ。この附近には水溜りがたくさんあり、自然と蚊が多い。それで私は合宿が終るまで、寝る時はいつも、厚手の靴下を2枚履き、手袋をはめ、シャツの上にヤッケを着て、顔にはタオルをのせて寝る事となつた。そうするとむせかえつて寝苦しい。しかし、この貧血ぎみの時に蚊に血を取られるよりはましであるように思われた。又、狭い岩の割れ目や岩の上で寝る為に、窮屈で背中が痛くてなかなか寝られない。けれどもこのような状態の中で1つだけ楽しみを見つけた。それは大阪では見ようとも思わないし、又見ようと思つてもあまり見えない星が、こちらでは今にも降つて来そうに空いつばいに輝いている。それを何も考えずに見ているとその間には流れ星の1つや2つはまず見られる。

その流れ星はほんの一瞬だが、なぜか、それは私の心を慰めてくれた。

朝は日の出と共に起きるのだが、皆蚊に悩まされて睡眠不足と空腹の為、食前の魚釣りに行くのさえおつくりになる。

この頃より私は鹿児島で喰いそびれた氷の事が思い出されて残念でしかたなかつた。

これは私にかぎつた事ではなく、皆しきりに飲み物や食べ物の事を言い出し始めた。この現象の特徴として、皆空腹でたまらないのに、



食べ物よりも氷とか冷えたビールやコーラなどを欲する傾向が強い。

これは我々が水もあまり飲まずに、この真夏の炎天下において、麦わら帽子ひとつで朝から晩まで魚釣りをしている為であるかもしれない。

1日の内いつたい何時間を魚釣りの為に費しているかを調べてみると、朝釣り、朝食後の釣り、昼食後の釣りで、合計9時間以上であろう。そして、魚を料理する時間が3食分で5時間ぐらい。結果、食事をする為には、1日の内最低14時間は何かの形で仕事をしている事になる。1日の内睡眠時間が約8時間、残りの16時間が起きている時間である。その内最低87%は食事の為の労働をしている事になる。

朝食後と昼食後の釣りの時には、滝氏と松宮の2人は水中銃で魚をおいかけて、40cm以上の魚を1日平均4匹取る。しかし我々4名は1日かかつてやつと小魚10匹を釣る程度である。

もし、我々がアクアラングの技術を持つており、せめて10mでも潜水出来ていたなら、滝氏と松宮の2人にはばかり潜水をまかせずに済んで、又、魚の収穫量ももう少し増えていたにちがいがなかつた。

以上の魚とスイカ3つが我々6名の1日分の全食糧である。当然の結果として、この6分の1が

1人の1日分の食糧となる。

このような食糧事情の為、8日頃より皆貧血症状が現われて来て、急に立ちあがつたりすると目まいがするようになった。

それに睡眠不足が加わつた。

特に、相当な体力を消費する潜水を担当している滝氏と松宮に、その貧血症状が著しく現われて来たように思われた。

医学的には非常に危険な状態であつたかもしれない。そして、我々の行動は日ごとに鈍くなつて行くように思われたし、実際そうであつた。米があればと、つい考えてしまう。

この合宿中においては、食事の際必ずジャンケンを行なう。これはだれが言うともなく、いつの間にか始まつていた。もつとも、このような食物を皆に公平に分配するには、この方法が一番である。この時ばかりは、我々の目はランランと輝いていた。

塩としょう油だけで料理する魚も、食べ馴れるとなかなかおいしい味がする。特に、タイのサシミや魚のスープ等はとても大阪では味わえないものである。もつとも、取つてから3、4時間後には料理して食べているのだから当然の事である。

真水製造器は中村が担当して、1時間に1.5ℓ程度作る事が出来た。しかし、冷却方法に問題があるようだ。

10日頃には、中村は一年生である為か精神的に大変疲れた様子で暇があれば時々岩かげで寝るようになった。

中沢は皮膚が弱々しくて、背中に水泡ができて大変痛い様子で、寝る時はうつむいて寝なければ

ならないようであつた。

山本は情緒不安定になり、少しいらいらしている様子であつた。又、もつともこれは皆にあてはまる事であるが、皆が痩せて行くのに彼女だけは皆と同じ物を食べていながら、肥えていくように思われた。実際、鹿児島で計量すると少々肥えていたらしい。

松宮は、下宿生活の効果が出て来たのか、それとも、本来、体が丈夫なのか知らないが一番元気であつた。

滝氏は、元気だが、無理をして潜水しているのが体に表われて来ていた。

私は空腹感から解放されないのでどうも体が自由にならず、又頭がさえない。

やつと12日に小島へ船が出せる状態になり、滝氏に連絡係として小宝島に残つてもらい、5名で小島に渡つた。

小島に渡つてから、今までの疲れが出てきたのか中村の体調が優れず、岩かげで皆の仕事が済むまで一人で休息している事になつた。

残りの松宮と山本が植物採集を行ない、私と中沢が測量を行なつた。

その日の午後、明日鹿児島行きの船が来る事がわかつた。

もう少し合宿を続行しようという意見もあつたが、この次の船がいつ来るかはつきりしない上に我々6名の健康状態もこれ以上の合宿には耐えられそうもない状態の為、13日をもつてこの小宝島および小島における今合宿を打ち切る事に決まり、午後の船で鹿児島に帰る事となつた。

(社会学部3回生)

